

ふるさと安曇野 きのうきょうあした

No.10 2013.09.07

道祖神祭りに託された願い



北小倉下区御柱（三郷小倉）平成25年元旦 初日の出を望む

安曇野で道祖神と言えは多くの人が「道祖神」と文字の彫られた石碑か、男女の神像が彫られた素朴な石像を思い出すことでしょう。

「木戸」と呼ばれる小さな集落を守ると言われている道祖神。その姿は地域の人々の暮らしや子どもたちの成長をあたたく見守っているかのようです。

かつては子どもが生まれると、お宮参りの代わりに自分の暮らす木戸の道祖神に地域の仲間入りの挨拶をし、我が子の健やかな成長を願ったといえます。最近はその風習はあまり見られなくなりましたが、道祖神への信仰や願いを込めた行事は、各地区で行われるさまざまな道祖神祭りに見られるように、今でも安曇野に息づいています。

そんな安曇野の道祖神に会うために、市外から訪れる観光客も絶えません。道祖神は安曇野を象徴する観光スポットでもあるのです。美しい北アルプスを背景として、青々とした田の畦に佇む道祖神に、変わらぬふるさとの姿を見出しているのでしょうか。昔も今も、さまざまな人々の願いを聞いてきた道祖神。時代とともに私たちの暮らしのカタチが変わり、道祖神祭りも少しずつ変化するなかで、願いの内容も変わってきています。しかし、いつの時代でも「よりよい未来」を願う心は変わらないかもしれません。

◆◆さまざまな道祖神祭り願い◆◆

安曇野では一年を通して地区ごとにさまざまな「道祖神祭り」が行われます。

新年には道祖神の傍らに御柱が立てられる地区があります。小正月には、三九郎と呼ばれる火祭りが行われます。

冬の終わりから春にかけては、穂高神社周辺とその他一部の地区で道祖神に色を塗るお祭りがあります。また、かつては各地で行われていた農作物の豊作を祈る行事「鳥追い」を道祖神祭りと位置づけている地区もあります。

七夕には道祖神に、七夕飾りのついた笹を飾る木戸も各地にあります。お盆には三郷の住吉・楡地区と上長尾の北村・東村・西村地区で、子どもたちがブテン（舞台）を曳く夏の道祖神祭りが開催されます。

これらの道祖神祭りは子どもが主役となって行われているものが多く、昔は子どもだけで道祖神祭りを運営することもありました。しかし、少子化で子どもがいなくなってしまったことから、祭りの途絶えてしまった地区も少なくありません。

◆◆御柱立て◆◆

御柱というと、諏訪大社の御柱祭りが有名ですが、安曇野では、新年に道祖神のお祭りとして立てる御柱があります。安曇野の御柱は、高いものでは20mほどの真っ直ぐなヒノキなどを柱とし、そこに松や扇のほか、「オンベ」、「ヤナギバナ」などと呼ばれる飾りをつけたもので、住民が力を合わせて立てるものです。

大半の御柱は立てられている期間が1週間から10日間ほどと短いこと、立てる場所が人通りの多い町部ではないこともあって、あまり人目に留まることはありません。しかし、冬晴れの深く青い空に、「シデ」などと呼ばれる五色の紙の飾りがひらめく御柱が屹立する様は、長く厳しい冬から新しい春へ向かう喜びを表現しているかのようです。

平成25年現在、安曇野では各地で17本の御柱が立てられています。御柱を立てる日も倒す日も地

区によって異なります。飾りなどもそれぞれ特色があり、そこに込められた願いもさまざまです。

市内御柱一覧

No.	地域	御柱	No.	地域	御柱
1	三郷小倉	北小倉下区	11	穂高柏原	柏原倉平
2	三郷小倉	北小倉中区	12	穂高柏原	塚原巾上
3	三郷小倉	北小倉上区(上手)	13	穂高柏原	塚原中部
4	三郷明盛	一日市場東村	14	豊科	吉野町
5	三郷明盛	一日市場本町(中町)	15	豊科	吉野中村
6	三郷明盛	一日市場本町(下町)	16	豊科	吉野梶海渡
7	三郷明盛	一日市場上町	17	豊科	吉野荒井
8	豊科	新田			
9	豊科	成相			
10	堀金三田	田尻南木戸			



田尻南木戸の御柱立て(堀金三田)

北小倉下区 冬から春へ再生を祝う(三郷小倉)

北小倉は安曇野市の南西部、北アルプスの山麓に位置し、畑地や果樹園が広がり、リンゴの栽培地としても知られています。北小倉では、上区(上手)、中区、下区の3箇所、毎年元日の早朝に御柱立てが行われます。

このうち、80数軒からなる下区の御柱立ての準備は前年10月から始まります。御柱立てに参加する小学2年生から6年生の子どもたちは、「大将」と呼ばれる年長の子の家で、御柱の飾りを作ります。

祭りの進め方や飾りの作り方を記したノートが代々伝わっており、今でも子どもが中心となって御柱作りをしています。オンベなどの飾りのほか、太陽を意味する日天と呼ばれる赤い円状の飾りと月天と呼ばれる白い三日月の形をした飾

りもあります。日天月天は大きくて作り方が難しいので、子どもの親や長老的存在である「世話人」と呼ばれる男性が手を貸して作ります。

かつて、この御柱立てに関われるのは男の子、それも4年生からでないといく間に加わることはできませんでした。また、大将は「長男」に限っていたようですが、少子化の影響から仲間入りは2年生から、さらに女の子も加わるようになりました。



御柱準備の様子(北小倉下区)

元日は朝5時から道祖神の周りに集まり、火を焚いて御柱を立てる準備をします。子どもたちは集落内を「御柱立て 来てくりやい」という声をかけて回ります。夜明け前には子どもも大人も総



月天の両端には紅白の巾着(5円玉100枚が入っている)が付けられる。

出で御柱を飾り付けます。飾りが終わると朗々とした木遣り唄とともに御柱が東を向いて立てられます。巨大な御柱を立てるのは容易ではありませんが、大人たちは木遣り唄に合わせて御柱を立てる綱を引きます。初日の光に照らされた御柱には、冬枯れから春の芽吹きへと向かう生命の喜びが表されているようです。

7日(現在は6日)早朝、御柱を倒す際も、子どもたちが集落を回って御柱寝せ(倒し)を知らせます。豊作を祈る太陽、暦を司る月、その下に各家を表すオンベを配すことで、新しい一年の集落全体の繁栄と息災を願っているのでしょう。

成相・新田のあめ市 商家の御柱と福俵(豊科)

成相区と新田区では、毎年1月15日ころにあめ市が行われます。あめ市は明治初めころに始まったといわれています。松本と大町、糸魚川を結ぶ街道の宿場町で商家が建ち並ぶ成相と新田では、1年の商売繁盛を祈る祭りであったと考えられます。

正月にはこの両地区でも御柱を立て、「出し」と呼ばれる大小2つの福俵を飾ります。御柱は、あめ市の日倒され、福俵曳きが行われます。これは両区の青年たちが競い合って大きな俵を曳き回す行事です。

道の途中で、「練る」といって、俵をぐるぐる回したり、地面にドスンとたたきつけたりする所作が行われます。これは俵を男性の生殖



成相の御柱

器、地面を女体に見立て、五穀豊穰や子孫繁栄を祈るものと考えられています。また、堰の水などに浸して「禊」をします。これも初めの発芽を促す儀礼と考えられています。福俵は最後に、前の年に祝いごとがあった家に納められます。

成相・新田の御柱は農村部の御柱で見られる願いと、商家の多い町部の願いである商売繁盛が、あめ市や福俵曳きなどの祭りと結びついたものなのかもしれません。

同様な願いの込められた御柱としては、一日市場本町（中町）があげられます。



新田の福俵曳き 矢原堰に福俵を浸す

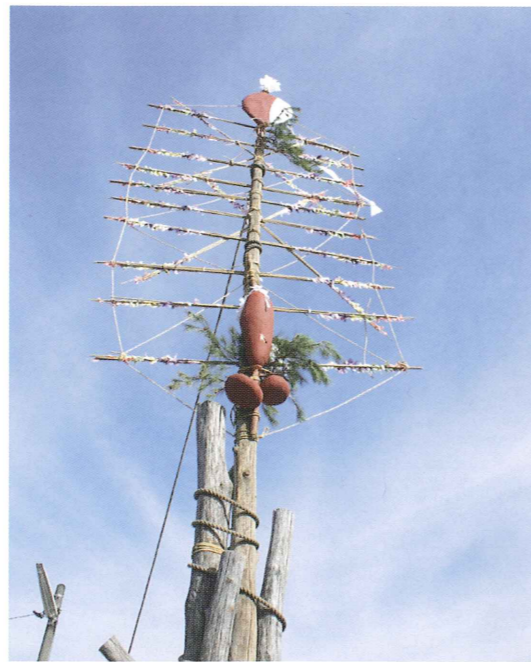
一日市場東村の御柱

子孫繁栄と歳神様のお迎え（三郷明盛）

三郷明盛の一日市場区では、毎年正月、4箇所御柱が立てられます。このうち東村の御柱は「お道具」と呼ばれる飾りが取り付けられるのが特徴です。

お道具は男根をかたどったものと、「三日月さま」と呼ぶ太陽と月をかたどったものがあります。三日月さまは、女神を象徴するとも言われていますので、男根と女性で子孫繁栄、五穀豊穰を象徴するものとわかります。

御柱は道祖神の前に立てられ、その年の恵方という縁起の良い方角に向けられます。恵方は歳徳神（歳神様）のつかさどる、めでたい方角のことです。恵方に御柱を向けるのは田尻南木戸（堀金三田）でも行われています。御柱立てが五穀豊穰とともに新しい年を迎える行事でもあることがわかる好例です。



一日市場東村の御柱

柏原倉平の御柱 復活した御柱立て（穂高柏原）

倉平では、御柱が途絶えていた時期がありました。ここには、江戸時代末の安政年間（1854～1860）に造られた道祖神2基があります。御柱立ては正月に大人の祭りとして行われています。

太平洋戦争が始まると、御柱立ては途絶え、戦後もしばらくの間は行われていませんでした。御柱が現在の形で復活したのは、昭和52年（1977）のことです。御柱立てが途絶えたことで、道祖神のまわりの整備が行き届かず、雑草が伸び放題になっていたのを惜しんだ倉平の人々が、環境を整え、御柱立てを復活させたのでした。

今では近くの田んぼに三九郎もつくられ、子どもも大人も一緒に楽しめる日になっています。



倉平の御柱立て

コラム① 三九郎の小屋掛けの思い出

小正月の道祖神祭りとして行なわれた三九郎（ドンドヤキ）は、完全に子どもが主体となるお祭りでした。小学生を中心とする男の子だけで組織された各道祖神の子ども組（道祖神仲間）が、祭りの準備から後片付けまで全て自分たちの力でこなしていました。

三九郎を組み立てる際の材料集めは、芯に使う山の立木を切り倒して運び、壁などに使う門松飾りや稲わらは各戸から集めて来ます。三九郎の日だけは立木を伐っても怒られなかったといわれます。食事やおやつは費用は、寄付を集めたり焼いた木を炭にして売って工面したものです。この活動を進める詰所、集会所の役割を果たしたのが「三九郎小屋」です。

木とわらを使い、先のとがった三九郎を組み立てる中で、外囲いをていねいにして屋根部分を造り、部屋として使う工夫がされていました。大人顔負けの壁や屋根をしつらえ、寝泊りのできる小屋もありました。堀金烏川下堀では、2間四方の2階建てという豪華な小屋が建てられました。また、明科地域の一部では、麦わらを使った小屋を傾斜地に掛け（建て）たといわれます。

近年の三九郎は大人の手助けで行われており、小屋掛けも途絶えています。昭和20年代までは木戸ごとにどこでも見られました。



現在の三九郎（穂高柏原倉平）

◆◆道祖神に新年のごあいさつ◆◆

真々部殿村のご年頭（豊科高家）

「ご年頭」、「道祖神のあいさつまわり」などと言われるこの行事は、松本市にほど近い、豊科高家の真々部殿村だけで行われています。殿村には庚申塔などと並んで建てられた文字碑の道祖神の傍らに、60cmほどの木像の道祖神を安置した小さな木の祠があります。

元旦、班長と呼ばれる小学6年生の子どもを中心に、小学生が集まって木像の道祖神を取り出します。子どもたちはこの道祖神像を抱きかかえながら集落内の家を回ります。

子どもたちが家を訪ねると玄関先で家人が出迎えます。子どもたちは道祖神像をお辞儀させ、新年の挨拶をします。挨拶を受けた家の人は「お年玉」を子どもたちに渡します。殿村は100戸以上の家がある大きな集落なので午前中をかけて挨拶にまわります。

現在は子どもが少ない上に忙しく大変だとい

ます。しかし、子どもが訪ねて来るのを楽しみにしている家も多いことから、平成25年は元旦ではなく、三九郎の日にまとめて行うようになりました。

道祖神のあいさつまわりは一時行われていなかったということですが、40年近く前に復活して現在まで続いています。



玄関で挨拶する道祖神

◆◆鳥追い 五穀豊穰を祈って◆◆

上長尾の鳥追い（三郷温）

かつては、安曇野だけでなく各地で鳥追いと呼

ばれる行事が行われていました。多くは、子どもたちが集落や自分の家の田畑で、十能などで金物を叩いて音を出し、唄を歌いながら鳥や虫を追って豊作を願う行事です。この鳥追いが上長尾の北村、東村、西村では道祖神祭りと結びつき、現在、安曇野では上長尾でしか見ることができない道祖神祭りとなりました。

かつて鳥追いは1月14・15日に行われていましたが、現在は子どもたちの休みに合わせ、それに近い土日に行われます。

1日目の夕方、上長尾北村道祖神前に北村の子どもたちが集まります。各地区の道祖神には幟が立てられ、五つ燈籠が飾られます。子どもたちはそれぞれの地区の提灯をつけた笹竹を持ち、太鼓を叩きながら、「今日は誰の鳥追いだ 太郎と次郎の鳥追いだあ おれもひとつ追ってやれ ホンガラホイ ホンガラホイ」と、鳥追いの唄を歌いながら東村道祖神に向かいます。東村道祖神まで行くと、東村の子どもと役員が待っており、合流して西村道祖神を目指します。西村道祖神まで行くと近くの商店で子どもたちはおやつや飲み物を買って一休みし、西村の子どもとともに北村道祖神に向かい集落を一周します。翌日も同様に行います。

北村では昭和18・19年ころまで御柱を立てていたといいます。一方で鳥追いは太平洋戦争中も途切れずに行われており、地域にとって大切な行事です。



上長尾の鳥追い 撮影：石田益雄氏

◆◆道祖神祭りと甘酒◆◆

上堀南原の道祖神祭り (堀金烏川)

西へ向かって流れてきた拾ヶ堰がほぼ直角のカーブを描いて北上するのがちょうど堀金小学校あたりです。そのカーブの南200mほどのところに上堀南原の道祖神があります。

上堀南原の道祖神祭りは2月初め、節分のころに行われます。朝、地区の役員や連絡員と呼ばれる小学6年生の親と小学生たちが南原集会堂に集まり、祭りの準備をします。甘酒は連絡員が作って鍋に入れて持ってきます。

道祖神に幟を立てて飾り、甘酒、果物、混ぜご飯、豚汁、お菓子などを供えます。また、その横には甘酒を入れた鍋と茶碗を用意します。

祭りの参加者全員がお参りすると、木戸の人々が、次々にお参りに来ては甘酒をいただき、お賽銭をあげます。

上堀南原だけでなく、安曇野で道祖神祭りという、かつてはいたるところで甘酒が配られたり、振舞われたといいます。



上堀南原の道祖神祭り

同じ上堀の曲戸南木戸でも、昔は年長でリーダーと呼ばれる子どもの家で甘酒を作ってもらい、子どもたちが道祖神の前を通る人やバイク、車まで呼び止めて甘酒を振舞っていたそうです。

◆◆彩色道祖神◆◆

穂高神社の周辺と一部の地区で、色の塗られた道祖神像を見かけることがあります。これは道祖神に色を塗るお祭りで、彩色道祖神などと言われます。

小学生が赤、白、青、黒などの絵の具で道祖神を彩ります。なぜ道祖神に色を塗るようになったのかわかりませんが、一説には穂高神社で行われる御船祭りで穂高人形を作っている人形師が道祖神に色を塗ったのがはじめてでないかと言われています。

田中の道祖神祭り (穂高)

穂高田中では2月3日に道祖神祭りが行われます。もともとは50戸ほどの集落でしたが、宅地造成により戸数が増え、現在は110戸程だということです。

祭りの当日、公民館では子どもと育成会の親たちが「オハナ」(マサキの枝に紙の造花をつけたもの)を各戸につき2本と道祖神に供える分とで250本ほど作ります。

「オハナ」を作り終えると、西の道祖神と東の道祖神(庚申像と大黒天碑)の色塗りをします。

これらはかつて、集落の東西の端に位置し、境を守っていたと言いますが、集落が広がったため、今は集落の中に位置しています。

昼食後、リヤカーに積んだ太鼓を叩きながら「オハナ」を各戸に配ります。配られた家では、お駄賃やお菓子を渡します。「オハナ」は居間や玄関、神棚などに飾るといいです。



田中の道祖神祭り 撮影：石田益雄氏

本郷上手村の道祖神祭り (穂高)

本郷上手村の道祖神祭りは4月、桜が咲くころに行われます。道祖神祭りの運営担当は地区の役員で、道祖神の色塗りは育成会が地区から依頼されて行います。

朝、子どもたちと役員が道祖神の前に集まり、用意した水彩絵の具で色を塗ります。道祖神とともに立ち並ぶ大黒天像や恵比寿像にも同様に色を塗ります。

塗り終わると、集落の大人も子どもも参加した花見を兼ねた直会となります。



本郷上手村の道祖神祭り

コラム② 境を超えて 集落の絆を深める

川口は、堀金の岩原・倉田・扇町の3区にまたがる40戸ほどの集落です。昔は川口村というひとつの村でした。川口では秋に観音堂、春は4月に道祖神の祭りを行っています。道祖神の祭りでは神前に白旗や赤旗を飾り、角燈籠には明かりが灯されます。神前には酒2升と煮干しを供えます。供え物は祭りに集まった川口の人たちがいただきます。神と人が飲食を共にすることで、道祖神を核として行政で定められた境を超えた集落の絆を深める祭りになっています。

祭りの後、わら縄を各戸に回します。祭りにかか



川口の道祖神祭り (堀金烏川)

た経費(小銭)をこよりに包み、わら縄に挟んで次の家に回します。昔からの風習で「差回し」と呼んでいます。

◆◆夏の道祖神祭り◆◆

住吉・楡の道祖神祭り（三郷温）

8月14日には住吉・楡地区で道祖神祭りが行われます。楡では、「ツボ」と呼ばれる集落（小路・北村・上手村・中村）から各1台、住吉からも1台のブテン（舞台）が曳き出されます。ブテンはアニメなどのキャラクター人形や、武者人形、幔幕、提灯などで飾られます。

夕方、ブテンは各道祖神から「船道」を通過して住吉神社まで曳かれていきます。5台のブテンは住吉神社前の公園で勢揃いします。夕闇の中、扇燈籠や提灯に明かりが灯されます。集まった人々はブテンを見たり、地区の屋台で祭りを楽しめます。その後、ブテンは住吉、楡の順に住吉神社の境内へ曳かれ、拝殿の前で「オフリヨウ」を渡します。

かつては、大勢の男子小学生で構成された「子供中」がブテンを作ったり、祭りの準備をしていましたが、子どもが少なくなり、今では女の子や大人たちも参加してブテンを作っています。祭りのカタチを少しずつ変えながら、大人も子どもも力を合わせて伝統のお祭りを続けているのです。



住吉・楡の道祖神祭り

夏の道祖神祭りは、上長尾でも行われており、上長尾では鳥追いと合わせて年2回の道祖神祭りが行われています。

◆◆願いごとを引き受け続ける道祖神◆◆

ここで紹介した道祖神祭りの他にも市内では多

くの道祖神祭りが行われています。安曇野の道祖神祭りは、他所から見に行ったり、集落以外の人に参加するものではありません。そのほとんどは住民が力を合わせて祭りをとり行うことで、互いを認識し、絆を深めるという意味合いが強いと言えます。子どもたちは「道祖神仲間」に入ることによって、年上から年下の子どもへ、その地域の子どもたちが持つ知恵を伝えることができたとも言えるのです。

道祖神祭りを調査する中、親や祖父母の世代になっている大人たちで「子どものころ道祖神祭りに参加した経験がある」と答えた人の多くが、「自分の子どもや孫にも祭りを伝えたい」という思いを持っていることがわかりました。

今、安曇野では企業や店舗、個人で設置した道祖神や、道祖神の土産物など、新たな願いの込められた道祖神が登場しています。これは道祖神祭りなどに見られる地域の人々の温かい思いが、安曇野以外に住む人々にも伝わり、その価値が認められたことも、理由の一つなのかもしれません。

道祖神は、昔から安曇野の人々が掛けてきた願いだけでなく、現代の私たちの願いをも引き受け続けていると言えるのではないのでしょうか。



さまざまな道祖神グッズ

「ふるさと安曇野 きのう きょう あしたNo.10」
 編集 安曇野市豊科郷土博物館
 発行日 平成25年9月7日
 〒399-8205 長野県安曇野市豊科4289-8
 TEL 0263-72-5672 / FAX 0263-72-7772
 URL : <http://toyohaku.jugem.jp/>